



10月30日

「女子像が線刻された土製品」の
記者発表をする栗市長

平成30年11月6日

11月号の「広報野々市」の表紙を飾った、末松廃寺跡から出土した天女が描かれた瓦塔（がとう）片に驚かれたことと思います。

末松廃寺跡は白鳳時代の7世紀後半に建立された北陸最古級の寺院です。昭和41・42年に文化庁による発掘調査が行われ、西に金堂、東に塔を配置した法起寺（ほっきじ）式の伽藍配置をした壮大な寺院であることがわかりました。昭和46年に史跡公園として整備いたしました。まだまだ解明しなければならないこともあり、平成26年度から再調査をしているなか、今年の8月8日に瓦塔片が発見されました。

発掘した瓦塔に顔が描かれている、それも三片出てきたものが、ひとつにつながる、と暑い夏の盛りの現場は大騒ぎになりました。手には払子（ほっす）という儀式に使う道具を持ち、縦縞（たてじま）模様の「裳（も）」というスカート状の衣服を身に着け、つま先の跳ね上がった履（くつ）をはいた「女子像」がそこにはありました。

本市の遺跡整備委員会委員を務められている松村恵司奈良文化財研究所長は、「弥勒浄土（みろくじょうど）の天女を描いた考古遺物は珍しく、弥勒信仰の北陸地方への浸透を示す貴重な資料である」と話しています。今後、さまざまな方面からの研究調査が進んでいくと思いますが、本市にとっては大変意義のある出来事であると思います。11月13日までは、開館一周を迎えた「学びの杜のいち カレード」で、11月15日から12月16日までは市ふるさと歴史館で展示いたしますので、この機会にご覧いただければと思います。

10月30日に横浜で開催された「図書館総合展」に出席いたしました。11月1日の開館一年を目前に控えたカレードでは、10月21日に入館者数が50万人を突破いたしました。この入館者数は本市が目標としていた一年間の入館者数30万人を大きく上回ったもので、市の内外を問わず多くの皆さんにご利用いただいていることをとても嬉しく思っております。

「図書館総合展」では、堀尾館長と、建物を設計いただいた益子先生、そして私による報告のあと、3人によるシンポジウムという形で進めさせていただきました。共通することは図書館をつくる時に、いかに多くの市民の皆さんがご利用され、そこを活躍する場にできるかということです。市民協働ということは当然ですが、行政だけでなく民間の考え方や知恵、工夫を入れながら官民連携ということでPFI方式での建設をし、管理運営も民間に委託するということでの成果も現れていると思います。開館時間を午後10時まででできたこと、行政ではできなかったさまざまな展示会ができたことが、来館者の増加につながったのではないかと考えております。何よりも来館された皆さんの楽しそうな笑顔をお見かけするにつけ、いろいろと思い悩んだことが、結果としてよい方向に向かっていることとして感じられます。

つらいときでも無理にでも笑顔を忘れずにいることが大切だと聞いたことがあります。それがきっかけになり、難問を解決する術を得られることもあれば、自然と明るい気持ちになることで乗り越えられる自信も出てくるのではないかと思います。

土の中から長い眠りの時間を越えて私たちの前に、その姿を現した弥勒菩薩に仕える「ほほえむ天女」もそんなことを教えてくれているのかなあと、心温まる思いがします。